

第2学年 国語科の実践

1 単元名 お話を楽しもう 「きつねのおきゃくさま」 あまんきみこ

2 単元目標

- 場面の様子や登場人物の行動、会話に着目して、きつねの気持ちの変容を読み取ることができる。

3 「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざすための指導の工夫

研究課題・・・子どもが解決したい問題を持ち、友だちとひびき合いながら学習する子どもの育成
手 立 て・・・子どもの思いや願いを見とった単元構想と授業づくり
ブロックテーマ「感じる心、素直に表現する自分」
・人の言動に何かを感じる姿 ・自分の思いや他者からの刺激を受け止め、素直に表現する姿

【聴く・話すについての指導】

みんなの前で話すことに慣れるために、朝の会での「スピーチ」や帰りの会での「友だちの良いところ発表」など、自分の考えを話したり、思ったことを伝えたりする場を設定してきた。スピーチでは、聞いている児童が質問するだけでなく感想や自分の似た経験を話すようにすることで、話す経験を積めるようにしている。学習での話し合いでは、ネームカードを使って友達の意見を把握し、「〇〇さんと同じで、～です。」「〇〇さんと違って、～です。」と、友達の意見と比較して自分の考えを伝えられるようにしている。また、同じ意見でも発表しても良いという雰囲気作りをして、自分の考えに自信がなかったり、考えを持つことができなかったりする児童も発表できるようにしている。他にも、授業の中でペアトーク、グループトークを多く取り入れ全員が考えを伝え合うことができるような場を設定してきた。その結果、自分の考えに自信がもてるようになり、少しずつではあるが、考えを話すことができるようになってきている。また、「教室はまちがうところだ」の読み聞かせをすることで、間違いをすることをみんなが責めたりすることはないこと、どうして違うのかをみんなで考える良い機会になることを意識できるようにしているところである。

聴く・話すことのルールでは、合い言葉を使って目と耳と心の3つで友達の話を聴くように意識できるようにしてきた。また、クラスで「聞く・話す」についても話し合い、模造紙に書いて教室の前方に掲示し、確認をできるようにした。他にも、席の形を、グループやコの字型など学習内容によって変化させてきた。自然に友達を見て話をしたり、聴いたりできるようにすることで、友達の考えを聴こう、友達に伝えようとする児童が少しずつ増えてきている。

【関わり合い・ひびき合い】

これまで、いろいろな学習の中で、話し合いをしながら問題を解決したり、答えを見つけたりしてきた。児童には、「先生は黒板メモ係。ときどき、お話していくよ。」と、自分たちが主役だということを伝えている。そうすることで、「先生に答えを教えてもらう」ではなく、自分たちで考えたり、答えを見つけようという意欲が見られるようになってきた。国語の物語文では、感想交流を大切にし、その中から子どもたちが考えたいという学習問題を設定してきた。しかし、想像だけの根拠のない話し合いになってしまったり、ただの考えの発表会になってしまったりして、ひびき合うまでに至らないことも多い。全てを子どもたちだけに話し合わせるのではなく、根拠を確かめたり語句の確認をしたりすることで、さらに深く読み取り、ひびき合っていけるよう意識して指導している。また、本学級には、話し合いに集中できず、いろいろなところに気が散ってしまう児童も数名いる。そこで、考えを持てている場合には話し合いの中で意図的に指名したり、話し合いで立ち止まったときに支援をしたりしている。

4 単元と指導について

<単元について>

「きつねのおきやくさま」は、同じ場面展開が繰り返される構造を持つ作品である。ひよこ、あひる、うさぎと順に登場人物が変わり、少しずつ内容が変化しながらも同じ場面展開が繰り返されていく。この構造は、昔話や絵本などに多く取り入れられており、児童にとっては先を予想しやすく、展開が非常にわかりやすいものになっている。また、繰り返しの構造によって、場面ごとのきつねの行動が比較しやすく、ひよこたちに対するきつねのかかわり方が移り変わっていく様子が捉えやすい。

物語は、太らせてから食べるための「えさ」という存在でしかなかったひよこたちを、自分の命と引き替えにしてまでおおかみから懸命に守ろうとする、きつねの気持ちが変わっていく姿が描かれている。このような行動をなぜきつねがとったのかを考える上で重要なキーワードとして、「やさしい」「しんせつな」「かみさまみたい」という言葉や、「ぼうっとした」「5回もつぶやいた」「きぜつしそうになった」があげられる。また、季節を表す言葉も書かれていて、長い期間きつねがひよこたちと過ごしていたことがわかる。これらの叙述から、「きつねの様子や気持ちの移り変わり」を、想像を広げて読み取っていくことができる考える。

また、主人公のきつねは最終的には死んでしまうが、「むかしむかし、あったとき」や「とっぴんぱらりのぼう」など民話の語り口調を取り入れることによって、この作品が悲劇的なストーリーで終わらず、一つのユーモラスな民話として読み手に語りかけていることも、作品を味わう上でとても適していると考えられる。

<指導について>

4月からこれまでに「スイミー」と「たぬきの糸車」の物語文を学習してきた。しかし、なかなか話を読み取ることができず、「スイミーの兄弟が生きていて良かった。」といった感想を書いたり、「わからない。」と感想を持てなかったりした。また、物語の話し合いの中でも、「糸車を回したいからいたずらをしていた」と根拠なく想像してしまうことが多かった。そのため、「きつねのおきやくさま」でも、浅い読み取りになり、物語を楽しむことができないことが考えられる。そこで、初発の感想では「きつねのこと」「きつねの気持ち」そして、「みんなで話し合いたい、わからないこと」を視点として指導し感想を書けるようにしたい。そうすることで、「ひよこたちと過ごすきつねの気持ち」や「おおかみと戦ったきつねの気持ち」、「恥ずかしそうに笑って死んだきつねの気持ち」に目を向けることができるだろう。そこで、「「食べようとしていたのに、なぜおおかみと戦ったのだろう」」という疑問が生まれ、「友だちと話し合いたい」という解決したい問題になると考えられる。

単元のはじめには、一人読みや語句の確認をしていきたい。一人読みをすることで、きつねの気持ちをじっくりと考えられるとともに、話し合いの中で、相手に考えを伝えやすくなるであろう。また、書き込みをすることで「きつねの気持ち」を考える上での根拠も意識できるようになってほしい。

さらに、この物語では、はじめは「お兄ちゃん」と言われて身震いしていたきつねが、「やさしい」「しんせつ」「かみさまみたい」と言われる中で、少しずつ「ぼうっとなった」「きぜつしそうになった」と変容していく。しかし、その反面「まるまる太ってきたぜ」という文も書かれている。また、「まだいるぞ、きつねがいるぞ。」という台詞は誰が言ったものかということも大切になってくる。この言葉を誰が言ったかによって、その場面の読みが全く正反対になってしまうこともある。おおかみが言ったと考えた場合、仕方なくきつねは出て行ったように読めてしまう。きつねが言ったことに気づけるようにすることで、きつねが自らおおかみの前に飛び出していったのだということに気づくことができる。このような一つひとつの言葉や文に着目することが、最後の「おおかみとたたかうきつねの気持ち」につながっていくのだと考えられる。

本時では、「「なぜおおかみと戦ったのだろう」」について話し合っていく。ここまでの話し合いで、きつねの変容に少しずつ気づいている児童もいるだろう。しかし、「きつねは、自分が食べる食べ物を守るために戦った。」と考える児童も多くいると考えられる。前時までの言葉の変化や、春、夏、秋と季節が変わるくらい長い期間一緒にいたこと、「きつねがいるぞ」と自分で言って飛び出していったことを根拠としながら、きつねの気持ちが、ひよこたちが食べ物ではなく守りたいものになんて変わった、ということに気づく姿を、ひびき合いの姿としたい

単元目標

○場面の様子や登場人物の行動、会話に着目して、きつねの気持ちの変容を読み取ることができる。

事前の学習 「ためきの糸車」 ⇒ ためきやおかみさんの気持ちを、叙述をもとに想像しながら読み取った。

※光村図書の、1年生（下）の教材より

初発の感想を書くことができる（関心）

- ★みんなで話し合うと、いろいろな考えを聞くことができて楽しいな。
- ★もっと、物語を読んで、みんなで話し合いをしてみたいな。

きつねのおきゃくさまって、どんなお話だろう①②

児童の感想から、全文を通した課題を作っていく。

- 題名読み ・きつねのところに、おきゃくさまが来るんじゃないかな。 ・友だちになるお話かな。
 ・きつねがおきゃくさまなんじゃない？ ・内容が知りたいな。

語句・登場人物の確認 わからない言葉の確認 ・主人公はきつね ・ひよこ・うさぎ・あひる・おかみ

全文通読（範読） 感想を書こう・感想交流をしよう

- ・最後にきつねが死んでしまっただけじゃなかった。 ・やさしいきつねの話だった。
- ・きつねは、ひよこやあひる、うさぎを食べようとしていたのに、なんで食べなかったんだろう。
- ・太らせようとしたのはなぜだろう。 ・守ろうとして、やさしいきつねだった。
- ・なんでぼうっとしたんだろう。 ・なんでみづるいしたんだろう。
- ・なんで、はずかしそうに笑ってしんだんだろう。
- ・なんでたたかったんだろう。

少しずつ、変わってきていると思う

一人読みをして、きつねの気持ちを想像することができる（読む）

きつねはなぜたべなかったんだろう。なんでぼうっとしたんだろう。なんで、たたかったんだろう。なぜはずかしそうにわらってしんだのだろう③④

登場人物・物語の背景の確認 ・絵を見ると、山の中だと思ふ ・春、夏とあるから、1年間くらいだと思ふ。

一人読み きつねの気持ちがわかることや、変わったところに線を引き、書き込みをする。

- 変
- ・「ぶるとみづるいをした」⇒お兄ちゃんなんてやめてくれ。食べ物にそんなことは言われたくないぞ。
 - ・「すこしぼうっとした」⇒初めて言われたから、少し嬉しい感じ。2回目、3回目とうれしさが大きくなる
- 行
- ・「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ」⇒ひよこたちは、オレが食べるんだ！
 - ・神様みたいと言ってくれるひよこたちを守りたい。
 - ・もう、家族だ。ひよこたちはオレが助けるぞ。
 - ・「はずかしそうに笑って死んだ」⇒食べようとしていたのに、やられちゃって恥ずかしい。
 - ・食べようとしていたけど、守れて良かった。 など

学習問題をもとに、文からわかる気持ちを書き込んでいくよう助言する。

きつねの気持ちの変容に気づくことができる（読む）

なぜたべなかったのかな なぜぼうっとしたのかな⑤⑥⑦

言葉に着目することで、少しずつ変容していくことをとらえられるようにする。

	ひよこと出会ったところで	あひると出会ったところで	うさぎと出会ったところで
裏の顔	・きつねはお腹がすいている。 ・ひよこを太らせて食べようと思っていた ・お兄ちゃんと言われて、はじめは嫌がっていた。 ・「まるまる太ってきたぜ」と書いてあるから、食べたい気持ちはあると思う。	・「にげる気だな」と書いてあるから、信じてないと思う。 ・あひるも食べられるぞ ・ひよこと同じように太らせて食べてしまおう。 ・「まるまる太ってきたぜ」と書いてあるから、まだ食べたい気持ちはあると思う。	・ここでもにげる気だと思っている。信じてない。 ・うさぎも食べられて嬉しいと思う。 ・うさぎも太らせれば、3匹も食べられる。 ・「まるまる太ってきたぜ」と書いてあるから、それでも食べたい気持ちはあると思う。
きつねの変容	・優しいといわれて、「ぼうっとした」と書いてあるから、少し嬉しい。 ・2回目もぼうっとしているから、ここで気持ちが少し変わったと思う。	・「しんせつなきつね」と5回もつぶやいていると言うことは、嬉しいんだと思う。 ・だから、親切にしていあげている。 ・「ぼうっとした」から、ひよことあひるへの気持ちが変わってきていると思う。	・うっとりして、気絶しそうになったんだから、食べる気持ちはなくなってきたと思う。 ・かみさまみたいにそだてたということは、食べる気持ちはなくなってきた。

着目する言葉

- ・ぶるとみづるいした
- ・少しぼうっとした
- ・心の中でやりとわらった
- ・ひよこは、まるまるふとってきたぜ

着目する言葉

- ・うっとりした
- ・5回もつぶやいた
- ・ぼうっとした
- ・あひるも、まるまるふとってきたぜ

着目する言葉

- ・うっとりして
- ・気ぜつしそうになった
- ・ぼうっとした
- ・うさぎも、まるまるふとってきたぜ

きつねの気持ちの変容に気づくことができる（読む）

きつねは、なぜおかみとたたかったんだろう？⑧⑨本時

⑧⑨⑩の学習を通し、「食べるため」に育てたが、「守りたい」という気持ちに変わったことに気づけるよう留

- ・大切に育ててきたひよこたちが食べられちゃうから、助けたんだと思う。
- ・自分で食べようと思って育てていたのに、オオカミにたべられるのは嫌だから出て行ったんだと思う。
- ・助けたんじゃないで、食べるために守ったんだと思う。

- ・はじめは「やさしい」なんて嫌だったんだけど、少しずつ優しくて親切な自分が好きになった。
- ・育てているうちに、家族みたいに思ったと思う。
- ・育てていると、好きになってくるよ。
- ・今までのことが嬉しくて、きつねの気持ちも変わった

きつねは、なぜはずかしそうにわらったのだろう⑩

「きつねもいるぞ」と言ったのがきつね自身だったことをおさえることで変容に気づけるようにする

- ・食べようとしていたのに、やられちゃってはずかしいな。 ・負けてしまって、はずかしいな。
- ・「ありがとう」なんて言ってもらって、初めてでははずかしいな。 ・いいことをして、照れてしまうな。
- ・看病してもらって、うれしいな。 ・みんなが助かってよかったな。 ・みんなを助けてよかった。

ひよこたちの行動もおさえることで、きつねの気持ちを考えることができるようにする。

はずかしそうにわらってしんだきつねのかわりに、3匹に手紙を書こう⑪

6 本時について

(1) 本時目標 読み取ってきたことをもとに「なぜ、きつねはおおかみとたたかったのか」を話し合うことで、きつねの気持ちが変わっていることに気づくことができる。

(2) 本時展開

学 習 活 動	
1 本時のめあてを確認する どうして、きつねはおおかみとたたかったのだろう。 たべたい ひよこは、まるまる ふとつてきたぜ あひるも、まるまる ふとつてきたぜ うさぎも、まるまる ふとつてきたぜ せつかく太らせたひよこたちをわたしたくない。 ひよこにあひる、うさぎはおれが食べるんだ。 そだてたのは、おれだ。だから、食べるぞ。 食べたいから、まもる。 きつね 「いや、まだいるぞ。きつねがいるぞ。」 ゆうきが りんりんと わいてきた じつに、じつに、いさましかったぜ はじめは食べたかったけど… ずっといっしょにいたから、まもりた い。もう、かぞくなんだ。 もっと、ほめてもらいたい。 やさしい おにいちゃん しんせつな おにいちゃん かみさまみたいな おにいちゃん たすけたい 2 学習の振り返りをする 今日の学習の感想を書こう ・ ひよこたちをたすけるためにたたかったということがわかった。 ・ 考えが変わって、きつねはひよこたちをかぞくだと思っていたとわかった。	気持ちが かわった 
主な支援・留意点 ◆評価【観点】	
○ 今日話し合うことについて確認することとで学習意欲を持てるようにする。 ○ 丸読みをして、本文の内容を確認する。 ○ 全体で話し合う前に、近くの友だちと意見交流をすることで、自分の考えに自信を持てるようにする。 ○ 発言がない子どもは意図的に指名し、発言がなくなるようにする。 ○ 名前カードを用いて、誰の考えか明確にする。 ○ クラスの「聞く・話す」を意識できるようにする。 ○ 変容に気づくことができなかった場合には、「いや、まだいるぞ。…」と、自ら出て行ったことを確認することで、気づくことができるように促す。 ○ 「食べたいから」「助けたいから」という考えの違いがはっきりわかるように、整理して板書する。 ◆ 叙述をもとに読み取ってきたことを、話し合おうとしている。【関心・意欲・態度】 ◆ きつねの気持ちの変容に気づいている。【読む】	

7 実践を終えて

《単元について》

本単元は、子どもたちの初発の感想から学習問題を作っていった。子どもたちが話し合ってみたくて意欲を持った感想が、「食べてやろうという気持ちだったのに、どうしてきつねはおおかみと戦ったのだろう。」という問題であった。また、「なぜ親切にしたのだろう。」「なぜすぐに食べなかったのだろう。」という感想を持った子どもも多かった。ので、場面を通してその問題を追っていくことにした。

問題について話し合っていくと、子どもたちからは「どのくらい食べたいのだろう。」「食べたい気持ちが変わっているかもしれない。」という疑問も出てきた。そこで、きつねの「食べたい気持ち」をグラフにして、模造紙に記録を残していった。すると、「ひよこたちが大事になってきているかもしれない。」と考える子どもがいる反面、「まるまる太ってきたぜ」という文から、「やっぱり、太ってきたから食べたいんだと思う。」と考える子も出てきた。子どもたちは、「きつねには、すぐ食べたい気持ちがあるけれど、ひよこたちが少しずつ大切になってきているのではないだろうか」と、読みを深めるたびに、「じゃあ、なぜ戦ったのか」という疑問をさらに強く持つようになっていった。

《子どもの解決したい問題となったかについて》

「どうして、きつねはおおかみとたたかったのだろう」という学習問題は、子どもたちにとって解決したい問題となったと考えられる。まず、子どもがクラスみんなの感想から、「これを話し合いたい」という問題を持ち、学習を進めていったからだと考え。ただ気持ちを追うだけでなく、「なぜたたかったのか」という、自分たちで作った学習問題を元に学習を進めていくことで、「知りたい」という気持ちを継続することができた。また、話の流れに沿って話し合いをして食べたい気持ちをグラフにしていくことで、きつねの気持ちの揺れに気づき、「じゃあ、なぜ戦ったんだろう」「気持ちが知りたい」という強い思いに繋がり、解決したい問題となった。

前時に考えを書いてみると、「食べ物を食べるために戦った」という考えと、「ひよこたちの命を助けるために戦った」という考えに分かれていった。本時では、その考えを話し合うことで、「どうしてなのか知りたい」「もっと考えたい」「解決したい」という思いになっていった。

《ひびき合いについて》

本時では、「食べたい」という気持ちから話し合いを進め、次に「助けたい」という意見を出していった。このように似ている意見から考えを出していくことが、「同じで」「違って」など友だちの考えに反応しにくくなってしまった。「似ている考えから」とはせず、もっと自由に子どもたちが意見を出し合えるようにすることで、「同じで」「違って」「でも」などの言葉も出てきて、ひびき合いもさらに深まっていたと考えられる。

板書では、子どもたちがわかりやすいように二項対立で板書していった。確かに、2つの意見にはっきりと分かれている場合には見やすいのだが、今回の場合、「助けてからやっぱり食べたいと思ったかもしれない」「友だちの考えを聞いていたら、悩んでしまった」という子もいたので、はっきりと分けずに板書するという方法もあった。そうすることで、思っていることをもっと素直に表現することができたのではないだろうか。

本時では、「きつねの気持ちの変容に気づく」という本時目標のもとに授業を行ったため、きつねの変容に気づくための手立てをとろうと、教師が出過ぎてしまった。本時だけで答えを出そうとするのではなく、次時のきつねが死んでしまった場面も含めて考えをまとめていくことで、子どもたちが焦らずじっくりと話し合うことができただろう。また、この目標を達成するためには、「まだいるぞ。きつねがいるぞ。」という言葉が誰が言ったのか、もっと早めに話し合い、確認をしておくことで子どもたちもさらに深く考えることができたと思われる。

物語には、答えが一つではないものもある。本単元「きつねのおきやくさま」でも、「まだいるぞ。きつねがいるぞ。」と言ったのが誰かははっきりと明記されていない。ということは、「食べたいから戦った」という読みがあってもよいと考えられる。そのことから、いろいろな読み方があることに気づくことや、自分の考えを深めるという目標で学習を進めるという方法もあった。

《成果と課題について》

成果としては、子どもたちの感想、疑問から学習問題を作り、それを元に話し合いを進めていったことがあげられる。これが、解決したい問題に繋がっていった。また、模造紙に毎時間話し合いしたことをまとめ、きつねの食べたい気持ちをグラフに書き込んでいった。それも、きつねの気持ちに気がつく手立てとなったと考えられる。また、本時では積極的に考えを伝えようとする子どもが多くいた。自分の考えを持つ時間やペアトークの時間を設定することで、話し合いに意欲的に参加できた。

課題は、「ひびき合いの深まり」にある。この授業では、教師の出過ぎてしまい話し合いを引っ張ってしまったことが問題であった。子どもたちの話し合いの中で、大切なキーワードが出たときや悩んでしまったときなどの出所は大切である。しかし、本時ではもっと子どもたちのことを信じ任せることで、自分たちの言葉で考えを深めていくことができたと考えられる。似た意見に偏らず、「でも」「違って」という考えも伝えていくことで、子どもたちはきつねの気持ちに自分たちで気づいていくことができたであろう。また、物語の読み方として、教師自身がもっと深く教材研究をする必要があった。答えは一つではなく、いろいろな考え方があることや、作者の願い・思いをもっと深く研究していく必要があることがわかった。